

## サードプレイスに関わる人々が語る地域の実像

～「だいかい文庫」の‘リンクワーカー’的人材から見た豊岡市～

古賀弥生 守本陽一

The real image of the community, by the people involved in Third Place:

The view of Toyooka City from the people like ‘link workers’ in Daikai-Bunko

KOGA Yayoi MORIMOTO Yoichi

### Abstract

Daikai Bunko, located on Daikai-dori Street in the center of Toyooka City, is a shared library, bookstore, and café based on a one-box bookshelf owner system. In addition, it is also a counseling center by medical and welfare professionals regarding loneliness and health, and functions as a place for social prescribing. A variety of people are involved here as store keepers and others who connect people with the community.

In this paper, we analyze the results of the interviews with the method of SCAT (Steps for Coding and Theorization) and clarify how these people, who can be called “connectors = link workers,” see the city of Toyooka.

The image of Toyooka as seen by the link-worker personnel involved in the Daikai Bunko included not only points of view and expressions of dissatisfaction regarding what “does not exist” and what is becoming desolate, but also suggestions of what “exists” from a perspective from outside the community. It also became clear that they were reading various signs of changes in current issues, such as the opening of the Daikai Bunko, the opening of the Professional College of Arts and Tourism, and the Toyooka Theater Festival.

**Key words:** Toyooka City, Daikai-Bunko, social prescribing, SCAT

(2023年2月28日受付, 2023年7月5日受理, 2023年9月30日発行)

### はじめに

2020年9月の第1回豊岡演劇祭開催、2021年4月の芸術文化観光専門職大学開学及び市長選挙による市長の交代など、芸術文化に関連の深い事柄だけ挙げても、ここ数年の豊岡市の環境変化は著しい。このような変化のなか、豊岡のまちの現況を市民はどのように見ているのだろうか。

本研究の分析対象としたのは、だいかい文庫の

一箱本棚オーナーあるいはお店番インターンとして人と人、人とまちをつなぐことを志向する人々である。本稿では、これら対象者へのインタビューを行い、質的研究の手法であるSCATによって分析することで、だいかい文庫というサードプレイスに関わるリンクワーカー的人材の視点を通じた豊岡市の現況とその変化の方向性の一端を定点観測的に明らかにする。

## 1. だいかい文庫について

### 1-1. だいかい文庫の概要

だいかい文庫は、豊岡市の中心部、JR豊岡駅前から延びる大開通りにある私設図書館であり書店でもある。店舗の前面は大開通りに面したガラス戸、2面は本棚で占められており、決して広くはないスペースだが、小規模なイベントスペースとして活用されることもある。

コーヒー等の飲み物も提供しており、店内では本を見る・読む・借りる・買うといった行動のほか、店番やお客同士で話す、Wi-fiを利用してPCで仕事をするなど、自由に過ごせる。年間の来訪者数は約3千人である。また、暮らしの悩みや居場所に関する相談を受ける「居場所の相談所」を開き、医療福祉専門職である相談員が対応している。

店番を務めるのは、医療関係者であるだいかい文庫のスタッフのほか、後述の一箱本棚オーナーかお店番インターンとして参加するさまざま職業の人や学生である。

だいかい文庫にある本は、一部の販売用新刊書籍を除いて、2週間、2冊まで無料で借りることができる（登録料のみ300円）。

一箱本棚オーナーは、月に2,400円の会費を支払うことで自分だけの本棚を持てる制度で、自分が所有し他者に薦めたい本を数冊から20冊程度置くことができる。なかには花を飾る、こけしを置くなど思い思いの自己表現の空間として本棚を活用するオーナーもいる。2023年2月現在の一箱本棚オーナー数は80人である。

お店番インターンは、一箱本棚オーナーではないが、店番として関わりたい人のための制度であり、地域や社会との接点を持ちたい人が月に2回程度を目安に店番を務めている。

一箱本棚オーナーやお店番インターンは、ボランティアで継続的にだいかい文庫と関わりを持ち、常連客や初めての来訪者との会話、来客同士の紹介その他、人と人をつなぐ役割を果たす。また、話題によっては地域の情報を媒介することもあり、人とまちをつないでいるともいえる。

### 1-2. 社会的処方とだいかい文庫

だいかい文庫の店主の守本陽一は医師であり、学生時代からケアとまちづくりの活動に関わってきた。医師が積極的に地域に出ることで、身体的な訴えだけでなく孤独や生きがいの喪失について悩む人々の支援を行う活動に関心を寄せ、まちの健康課題を把握し利用可能なリソースや解決方法を探る「地域診断」、そして課題解決のアプローチとしての「YATAI CAFE」に取り組んできた。その延長線上に、本を切り口とした社会的処方の場であるだいかい文庫が生まれた。

社会的処方とは、一般財団法人オレンジクロスの「社会的処方白書」では英国の Social Prescribing Network による定義を引用し、「社会的・情緒的・実用的なニーズを持つ人々が、時にボランティア・コミュニティーセクターによって提供されるサービスを使いながら、自らの健康とウェルビーイングの改善につながる解決策を自ら見出すことを助けるため、家庭医や直接ケアに携わる保健医療職が、患者をリンクワーカー (link worker) に紹介できるようにする手段」としている。

日本では近年、「人とのつながりがない＝社会的孤立」を解決する方法の一つとして社会的処方が注目されており、医療的なケアだけで解決できない、ある人が抱える問題を地域における多様な活動とマッチングすることで支援する考え方とされる。例えば「眠れない」という患者に医師ができることは睡眠薬の処方かもしれないが、その人のニーズや好みに合わせてダンスサークルなど地域での活動を紹介することで、本人がよりよく生きられる場合もある。社会的処方の考え方では「人から施されるだけではなく、自らが支援する立場にも立てる」「ほかの人たちとつながることができる」「学び続けるものを持っている」「身体的・精神的に活動的である」「周囲で起きていることに注目している」という5つの方法を支援することが目的であるとされている。

だいかい文庫では、前項で述べたような本に関わる機能やカフェ等として利用できる以外に、さまざまな人が居場所としてふらりと訪れ自由に過ごし

ている。また、週に一度開かれる「居場所の相談所」が医療従事者であるスタッフが暮らしや健康に関する相談に応じ、社会的処方機能の発揮している。

### 1-3. リンクワーカーの重要性

社会的処方においては、リンクワーカーの存在が重要であるとされている。「社会的処方白書」によれば、英国でのリンクワーカーの定義は、主に非医療者で社会的処方者（主として医師、看護師等）から紹介を受けた人を全人的にアセスメントし地域資源につなぐ人材である。日本におけるリンクワーカーの機能を果たし得る人材や組織の例として医療ソーシャルワーカー、地域包括支援センター、生活支援コーディネーターなどが挙げられ、合わせて自治会等の地縁組織、NPO等も社会的処方のリンク機能を担いようとしている。リンクワーカーは医療者からの依頼を受けて患者や家族と面会し、地域活動とマッチングさせる人であり、「つながりを作る人」とされる（西2020 p51）。

平易な表現をすれば「まちの資源をよく知り、困っている人とマッチングできる人」であり「おせっかいおじさん・おばさん」ともいえる。つまり「まち」と「人」の両方に通じた人材であり、社会的処方はもちろんのこと、まちづくりにおいても重要な役割を担う可能性を有する人材である。

だいかい文庫に一箱本棚オーナーやお店番インターンとして関わる人々は、正確な意味でのリンクワーカーではないが、「つながりを作る人」の場合も多く、次第にリンクワーカーの要素を獲得しつつある。したがって本稿では彼らを「リンクワーカー的人材」と位置付ける。

### 1-4. サードプレイス論から見るだいかい文庫

だいかい文庫は上述のとおり、さまざまな人にとっての「居場所」であり、「居場所の相談所」の機能も有している。

「居場所」は、特定の社会課題に向き合う「目的意識」や他者と自分のぶつかり合いからつくりあげる場である（阿部2011）ものと、ウェルビーイングの文脈で語られる「誰もが」「居心地の良い」場所であ

る（アメリカの都市社会学者・オルデンバーグのサードプレイスの概念）ものに分かれる（李2022）。だいかい文庫は「居場所の相談所」など「居場所」という言葉を用いてはいるが、訪れるすべての人を包摂する場として後者の意味合いが強く、サードプレイス的な場所であることがわかる。

オルデンバーグは、「インフォーマルな公共生活の中核的環境」を「サードプレイス」と名付けた（オルデンバーグ2013 p59）。サードプレイスは中立の領域に存在し、訪れる人を平等に扱い、会話を主な活動とする、いつでも一人で出かけて行ける利用しやすさがあり、常連がその場所に特色を与えるなど<sup>1)</sup>の特徴を持つ（同 p97）。そしてオルデンバーグは、サードプレイスの機能のひとつとして、アメリカの都市計画研究に大きな影響を与えたジェイコブズが「顔役」（パブリック・キャラクター）と呼ぶ人材の供給も挙げている。「顔役」とは、「近所のあらゆる人材を知っていて、近所のことを気にかけている人物のこと」であり、リンクワーカーとの共通性が見いだせる（同 p20）。

さらに石山は、オルデンバーグのサードプレイス論を「伝統的サードプレイス」とし、近年のサードプレイス概念の拡張について触れている。石山によれば拡張の方向性はオンライン、商業性、テーマコミュニティである。テーマコミュニティの方向性に拡張したテーマ型サードプレイスは目的交流型であり、開放性など空間性が高く橋渡し型の社会関係資本が形成される場である（石山2021）。石山の整理に依拠すれば、だいかい文庫はテーマ型サードプレイスに近いが、豊岡市の大開通りに開店しているという地域性の影響も強い。

こうしたことから、だいかい文庫に能動的に関わる人々は地域社会とのつながりや参画の意識が高く、橋渡し型社会関係資本の構築に関わるキーパーソンである可能性が指摘できる。

本稿では、だいかい文庫利用者であり一箱本棚オーナーあるいはお店番インターンとして店番も行う人々を、リンクワーカー的役割を果たしうるまちづくりのキーパーソンであると捉え、それらの人々から見た豊岡のまちの姿を描出する。

## 2. 先行研究

本稿は、街に関わる特定の人々から見た豊岡市の現況と変化の方向性を描出することを目的としていることから、豊岡市のイメージに関する先行調査等を確認しておく。

まず、Google Scholarにより「豊岡市」というワードで検索すると2021年以降503件の記事がヒットするが、市民や通勤・通学者等ステークホルダーから見たまちの姿に関わるようなものは見当たらない。

そこで、豊岡市政に関わる資料から検索すると、豊岡市民の「我がまち」に対する意識については、2016年の豊岡市基本構想策定のための市民アンケートにその一端が垣間見える。自由意見欄の記入で、豊岡市の魅力や自慢できることとして『『自然』に関するものが最も多く、“自然が豊か”“自然環境に恵まれている”などがあげられている。次いで『食べ物』に関するもので、“お米が美味しい”“お肉や海産物が美味しい”など、『人の良さ』に関するもので、“人柄がよい”“人とのつながりがある”などがあげられている」と報告された(豊岡市2016 p28)。

また、豊岡市では毎年、政策モニタリング調査が行われており、「自然と環境」「子育てと教育」等、9つの領域について市民による政策評価を実施している。このうち「地域の歴史、伝統、文化芸術」の項目では、老年層は他の年齢層に比べ、地域の歴史等を誇りに思っている、「豊岡市の誇り」と感じているものは「自然」及び「町並み」の回答数の割合が他の選択肢に比べ高い、城崎地域は他の地域に比べ、質の高い文化芸術に触れられる機会が多いと感じ文化芸術が盛んなまちだと思っている住民が多い、といった傾向が分析されている。

さらに「まちづくりと観光」の項目では「豊岡市で暮らすことに価値や魅力があると感じているか」「進学や就職で豊岡市を出ていく子どもたちに対し、将来帰ってきて欲しいと思うか」という設問への否定的な回答が、いずれも2021年より2022年のほうが有意に増加しており、やや憂慮される調査結果となっている(豊岡市2022)。

これらの調査はいずれも市政に生かされているものであろうが、その目的ゆえに設問の偏りがあり、調査対象は市民全体から抽出されるものの回答は60代以上に偏っている<sup>2)</sup>。

本稿では、必ずしも豊岡市民ではなく豊岡市の魅力や課題に鋭敏な感覚を有すると思われるだいかい文庫の一箱本棚オーナーやお店番インターンを対象に、インタビュー調査により彼らの感じるまちの姿を描出する。

## 3. 研究の手法

だいかい文庫の一箱本棚オーナーまたはお店番インターンのうち調査協力に同意が得られた8名を対象にインタビューを行った。対象者の属性等は表1のとおりである。

これらの人々から見た豊岡のまちの現状と変化の兆しを2022年9月時点で捉えた。

質問項目は以下の5点で半構造化インタビューとした。

- (1) あなたはこのまちについてどういう感情を持っていますか？
- (2) このまちの課題はなんですか？
- (3) このまちのいいところはどこですか？
- (4) だいかい文庫ができて、まちはどう変わりましたか？
- (5) だいかい文庫に関わり続けることで、まちは今後どう変わりそうですか？

なお、このインタビューでは同時にだいかい文庫に関わる「個人」としての変容等に関わる質問も投げかけており、本稿はそのうち「まち」に関わる問いへの回答を抽出したものである。一部、「個人」への問いであっても「まち」に関わる回答が含まれるコメントも本稿の分析対象としている。

分析にあたっては、発せられた言葉をすべて記録しテキスト化したうえで、SCAT (Steps for Coding and Theorization) の手法を用いた。SCATは、観察記録や面接記録などの言語データをセグメント化し、

表1 インタビュー対象者

番号	世代	性別	職業	居住地	だいかい文庫での役割
1	20代	男性	介護職	市外	お店番インターン→一箱本棚オーナー
2	20代	女性	アルバイト	市内(移住者)	利用者→お店番インターン→一箱本棚オーナー
3	20代	女性	アルバイト	市内(市外在住経験あり)	利用者→お店番インターン→一箱本棚オーナー
4	30代	女性	団体職員	市外(市内通勤者)	一箱本棚オーナー
5	30代	女性	アルバイト	市内(市外在住経験あり)	お店番インターン
6	50代	女性	日本語教室ボランティア	市内	一箱本棚オーナー
7	60代	男性	無職	市内(単身赴任経験者)	お店番インターン
8	60代	女性	地域支援員	市内	一箱本棚オーナー

そのそれぞれに〈1〉データの中の着目すべき語句、〈2〉それを言いかえるためのデータ外の語句、〈3〉それを説明するための語句、〈4〉そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案して付していく4ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論を記述する手続きとからなる分析手法(大谷2008)である。SCATを用いることで、分析過程の明示と省察や反証の可能性を高めることができる。

本稿では各人のインタビュー結果から得られたストーリー・ラインを統合することで、豊岡市の姿を描出することを試みた。また、インタビュー対象者ごとの理論記述をもとに、さらにコーディングし、「現状」と「変化の兆し」に分類したうえで、それぞれのコードの関連性を示した。

#### 4. 調査結果と分析

各人のインタビュー結果の分析を行ったSCATの例は表2のとおりである。インタビュー対象者は年齢、性別、出身地、職業など背景が多様であり、それぞれのストーリー・ラインはその背景が反映されているが、理論記述は個別の状況を排している<sup>3)</sup>。

表2のような分析を8人のインタビュー対象者ご

とに行ったうえで、本稿ではそれらを4-1に示すような手順で統合している。

##### 4-1. だいかい文庫に関わるリンクワーカー的人材から見た豊岡市 ～理論記述の再構成による「現状」と「変化の兆し」～

インタビュー対象者ごとの理論記述では、豊岡のまちの現状がシビアに描出される一方で、「だいかい文庫」の開館を含むここ数年の出来事によって変化の兆しを感じ取っている様子も窺えた。

その様子を提示するため、各インタビュー対象者の理論記述から、まずは「現状」を「良い点」(ある)と「残念な点」(ない)を抽出し分類した(図1)。さらに「残念な点」を掘り下げた理論記述について「現状」と「変化の兆し」に分類したうえで、それぞれのコードの関連性を示して再構成したものが図2である。

図1及び図2から描き出される豊岡市の姿は、以下のとおりである。

\*\*\*

豊岡市は市街地と自然が共存しており、近隣市町と比較すると文化的な資源が多く、まちづくり活動に関わる人も多い印象がある。食文化や温泉の



「良い点」(ある)

「残念な点」(ない)

《「ない」ことが目立つまち》

- ・市町村合併によってできた、都会とは言えないまち。
- ・まちの特色はこれといって、ない。
- ・まちの魅力をすぐに語れない、残念なまち。
- ・若者が仕事と生活を充実させるような環境が不足。
- ・若者の居場所のなさ  
→若年人口の流出を防ぎたい行政施策と現実の地域社会の意識の乖離



(一度地域外へ出てみてわかる)  
《都市部や他都市と比較すると「ある」まち》

- ・市街地と自然の併存。
- ・近隣市と比較し、文化的な資源が多い。
- ・まちづくり活動者が多い。
- ・自然/食文化/温泉。
- ・日常(居場所)と非日常(観光)が同居している。
- ・都会の閉塞感、住みにくさとの比較による豊岡市の良さ。
- ・人口が密集する都会生活での疲弊/豊岡市での人が多すぎず、かつ近隣の人々と適度な会話もある生活の良さ

図1 豊岡市像①

【現状】

【変化の兆し】

<p>《閉鎖性》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の人々が移住者に対して冷たく感じられる。</li> <li>・そのために、地域になじめない移住者がいる。</li> </ul>	→	<p>《意識の転換》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・就職先や、だいかい文庫のようなサードプレイスがあることで、まちへのイメージの転換が起こる。</li> <li>・コミュニティに参加し、居場所ができることで、まちへの定住も意識されるようになる。</li> </ul>		
<p>《多様性・寛容性の欠如》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まちなかに障害のある人たちが立ち寄れる場が少ない。</li> <li>・障害者などマイノリティーの存在が見えづらく、多様な人々が交流する場がないことや特性によって分断されている可能性。</li> <li>・市民の「演劇のまちづくり」を巡る意見の相違は「分断」。異なる意見を理解しようとする姿勢の欠如。</li> <li>・「若者」を求め、「私」は求められていない →個性を持った「私」の居場所がない</li> </ul>	→	<p>《地域外からの刺激》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域おこし協力隊の人材が多くいる。</li> <li>・若者やアーティストがいる芸術文化観光専門職大学の地域への関わりに期待感がある。</li> <li>・多様な人材が入って来る機会が多く、地域内にいながら全国に知人ができるまち →地域おこし協力隊、芸術文化専門職大学、豊岡演劇祭の存在・開催意義</li> </ul>		
<p>《大開通りの衰退》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大開通りの衰退が顕著である。</li> <li>・シャッター商店街になりつつある大開通り</li> </ul>	→	<p>《だいかい文庫の存在感》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大開通りに明かりを灯すだいかい文庫の意義</li> <li>・だいかい文庫コミュニティが、まちにさらなる変化をもたらすことに期待。</li> <li>・Uターン者や新たな店の増加。</li> <li>・新しい活動に自ら関わる意識を持つ人々の存在。</li> </ul>		
<table border="1"> <tr> <td> <p>《行政への不満と期待》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出石永楽館や、そこの歌舞伎公演は市の誇り。コロナ禍で公演が中止され、再開されていないことなどで文化行政に不満。</li> <li>・市政運営の方向性が不明</li> <li>・行政による市民活動支援に期待</li> </ul> </td> <td> <p>《市民の側の課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・居場所として重要なサードプレイスの機能に対する認識不足。</li> <li>・演劇のまちづくりや観光振興よりも市民生活の向上が先であるという意識</li> </ul> </td> </tr> </table>	<p>《行政への不満と期待》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出石永楽館や、そこの歌舞伎公演は市の誇り。コロナ禍で公演が中止され、再開されていないことなどで文化行政に不満。</li> <li>・市政運営の方向性が不明</li> <li>・行政による市民活動支援に期待</li> </ul>	<p>《市民の側の課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・居場所として重要なサードプレイスの機能に対する認識不足。</li> <li>・演劇のまちづくりや観光振興よりも市民生活の向上が先であるという意識</li> </ul>	→	<p>《市民活動の可能性》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・行政頼みではない、草の根の市民活動が生まれ広がる機能をだいかい文庫に期待</li> <li>・個人が変わりまちが変わる契機となる場としてのだいかい文庫</li> <li>・多様な人材が自分たちで課題を解決していくような(だいかい文庫以外の)場所が拡大していくことの重要性</li> <li>・市民も行政もチャレンジする人を応援してくれると感じられる。</li> <li>・豊岡劇場再開に向けての活動などの例から、豊岡市の人材の多様さ。</li> </ul>
<p>《行政への不満と期待》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出石永楽館や、そこの歌舞伎公演は市の誇り。コロナ禍で公演が中止され、再開されていないことなどで文化行政に不満。</li> <li>・市政運営の方向性が不明</li> <li>・行政による市民活動支援に期待</li> </ul>	<p>《市民の側の課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・居場所として重要なサードプレイスの機能に対する認識不足。</li> <li>・演劇のまちづくりや観光振興よりも市民生活の向上が先であるという意識</li> </ul>			

《医療機関不足》変化の兆しなし

図2 豊岡市像②

魅力もあり、日常的な生活と非日常である観光が同居している。一度都会で生活した経験をした人には、都会との比較による豊岡市の優位性を感じており、人が多すぎず、かつ近隣の人々と適度な会話もある生活の良さを指摘する。

一方、豊岡市の課題は、市町村合併によってできたまちでこれといった特色がないため、まちの魅力をすぐに語れないなど「ない」ものが多く挙げられる。若者が仕事と生活を充実させるような環境が不足しており、居場所に乏しい。若者の居場所がない

この背景には、中高生が集まると苦情を言われるなど地域の人々の意識の問題も指摘される。若者だけでなく、地域の人々が移住者に対して冷たく感じられ、そのために、地域になじめないケースもある。しかし、豊岡市での就職先や、だいかい文庫のようなサードプレイスで新たな居場所ができることで、まちへのイメージの転換が起こり、定住も意識されるようになる。

また、障害者などマイノリティーの存在が見えづらく、多様な人々が交流する場が少ない。市民の「演劇のまちづくり」を巡る意見の相違からは、異なる意見を理解しようとする姿勢の欠如も感じられる。行政は若者の流出を防ぎたいようだが、「若者」を求め「私」は求められていないように感じられるなど、個性を持った「私」の居場所がない。総じて多様性や寛容性に欠ける面がある。

これに対しては、近年、地域おこし協力隊の人材が増えていることや、アーティストの移住、芸術文化観光専門職大学の開学に変化への期待感がある。豊岡演劇祭も始まり、多様な人材が入って来る機会が増えたことから、地域内にいながら全国に知人ができるまちでもあり、今後の変化が見込まれる。

市政に対しては、文化行政、市政運営の方向性が不明であるなど不満もあるが、市民活動支援の役割が期待されている。市民の側にも課題があり、若年人口の流出を防ぎたい行政施策に対し、現実の地域社会の意識は乖離がある。サードプレイス機能の重要性に対する認識不足や、演劇のまちづくりや観光振興よりも市民生活の向上が先であるという意識が変化を阻む要因になっている。しかし、だいかい文庫の展開や豊岡劇場再開に向けての活動などの例から、豊岡市の人材の多様さも感じられ、市民も行政も、チャレンジする人を応援する機運がある。行政頼みではない、草の根の市民活動が生まれ広がる機能がだいかい文庫に期待され、だいかい文庫のような場の拡大によりまちが変わると感じられる。

医療面での悪条件は大きな課題と捉えられているが、この面の解決は方向性が見いだせていない。

## おわりに

だいかい文庫に関わるリンクワーカー的人材から見えている豊岡市像は、「ない」ものや寂れつつあるものに関する指摘、不満の表明だけでなく、地域外からの視点(必ずしも本人が地域外から移入して来たかどうかに関わらず、地域外の人と接する機会から得た視点も含む)による「ある」ものの提示も含まれていた。また、だいかい文庫の開館や芸術文化観光専門職大学の開学、豊岡演劇祭の開催など近年の変化を背景に、現状の課題が変化する兆しもさまざまに読み取っていることが明らかになった。

本稿では、まちづくりのキーパーソンともいえる特定の人材を対象とし、市政資料とは異なる形で収集されたデータにもとづく「豊岡市像」を2022年9月の時点で描き出しており、他の要素を加味した分析には踏み込んでいない。豊岡市の今後の変化に伴う人々の「まち」のイメージの変容は追跡調査も必要であろう。これらの点は今後の課題とした。

## 注

- 1) ほかに、目立たない、遊び心のある雰囲気、もう一つのわが家といった特徴も示されている(オルデンバーグ2013 p97)
- 2) 2020年国勢調査人口で豊岡市の60歳以上人口は全体の48.7%であるが、政策モニタリング調査(2022年実施)の回答者は60歳以上が59.9%を占めている。
- 3) ストーリー・ラインは「データに記述されているできごとに潜在する意味や意義を、主に〈4〉に記述したテーマを紡ぎ合わせて書き表したもの」(大谷2008 p32、大谷2019 p308)であり、理論記述はテキストの分析から言えることをストーリー・ラインに含まれていることばを用いて表現するものである(大谷2019 p324)。したがって、文言自体はストーリー・ラインと理論記述では重複するが、ストーリー・ラインがデータの示す意味を再文脈化したものであるのに対し、理論記述はデータから得られる理論的知見であるとされ、一般性を有する記述となる。

## 文献

- 阿部真大(2011)『居場所の社会学——生きづらさを越えて』日本経済新聞出版社  
石山恒貴(2021)「サードプレイス概念の拡張の検討——



- サービス供給主体としてのサードプレイスの可能性と課題」日本労働研究雑誌 2021年7月号(No.732)、pp4-17
- 李妍焱(Li Yanyan) (2022) 「市民セクターの新たな担い手の育成へ—「積極的ではない」若い世代へのアプローチの可能性を考える—」駒澤社会学研究 58号、pp1-25
- 西智弘編著(2020)『社会的処方 孤立という病を地域のつながりで治す方法』学芸出版社
- 西智弘・守本陽一・藤岡聡子(2020)『ケアとまちづくり、ときどきアート』中外医学社
- 大谷尚(2008)「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学 54(2)、pp27-44
- 大谷尚(2019)『質的研究の考え方—研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会(第6刷2022)
- レイ・オルデンバーグ(Ray Oldenburg) (2013) (忠平美幸訳/マイク・モラスキー解説)『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房(第14刷2022)
- 一般社団法人ケアと暮らしの編集社ホームページ  
<https://carekura.com/daikaibunko>(2023年2月27日確認)
- 一般財団法人オレンジクロス「社会的処方白書」  
[https://www.orangecross.or.jp/project/socialprescribing/pdf/socialprescribing\\_2020\\_01.pdf](https://www.orangecross.or.jp/project/socialprescribing/pdf/socialprescribing_2020_01.pdf) (2023年2月27日確認)
- みんとしょネットワーク「本と暮らしのあるところ だいかい文庫」  
<https://sancacu.org/archives/introduce/daikai> (2023年2月27日確認)
- 豊岡市 市民アンケート概要版 平成28(2016)年7月実施  
[https://www.city.toyooka.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/002/932/questionnaire\\_summary.pdf](https://www.city.toyooka.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/932/questionnaire_summary.pdf) (2023年2月27日確認)
- 豊岡市まちづくりアンケート(政策モニタリング調査) 2022年3月公表(1~2月実施)  
[https://www.city.toyooka.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/016/014/2022.pdf](https://www.city.toyooka.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/016/014/2022.pdf) (2023年2月27日確認)